

研究・調査プロジェクト報告

日蓮信仰と石原莞爾

野村佳正

はじめに

戦間期の時代の日本で、社会に少なからぬ影響及ぼしたと考えられるのが、アジア主義的イデオロギーである。その代表的なものは、満州事変の立役者といわれる関東軍作戦参謀陸軍大佐石原莞爾によるものである。石原は、深く日蓮教学¹に帰依して、その影響からアジア主義と軍事理論について確信を深めていったと考えられる。そして日蓮信仰に裏付けられた彼の政治的・軍事的信念を石原イズムと呼ぶならば、石原イズムこそ満州事変立案の基礎と考えられる。では、彼の日蓮信仰は石原イズムにどのような影響を与えたのだろうか²。

少なくとも、三つの点から、石原イズムの根底には日蓮信仰が見て取れる。それは、国体主義、アジア主義、軍事理論である。

まず、石原は戦争後においてもなお確固たる天皇論者であった³。彼のエトスは、天皇に忠誠を誓った軍人であるからこのことは当然であるともいえる。他方、日蓮聖人は、「遺文削除問題」でも知られるように、法華経絶対論者であつても天皇絶対論者ではなかつた。では日蓮主義と天皇制を如何に関係づけたのであろうか。

次に、石原は、若い時から中国との提携が必要と考えていたといわれている。したがって、中隊長時代に発生した辛亥革命時には、中国革命万歳を中隊全員で唱和した。また、後年、満州事変後に、「五族協和」の「王道楽土」を満州に築こうとした点からみても、アジア主義の影響が認められる。確かに、日本が満州を直接支配し搾取せず、現地に大幅な自治を認めたのは、外国から国際法上の責任追及を避け、戦後処理を容易にして、開発を活発化させるという政治上の理由はもちろんあろう。しかしながら、石原は心から東洋的道義心に基づいてアジア諸民族が一体化し共榮することを祈っており、そこから満蒙独立論を展開したということも事実である。しかも、この王道論は、後述するように、彼に内在する日蓮信仰の成熟と深く結び付いているのである。では、日蓮信仰とアジア主義はどのように結びついたのであろうか。

最後に、石原は米国との協調の可能性を一切認めず、日米最終決戦を確信していることである。無論、日米関係が悪化していること、そして日米戦争の確率が高いことは、欧州においてさえも多くの識者が指摘していた。しかしながら「神意ナリ」とまでは断定できるほどの確信はどこからくるものであろうか。この確信の背景には「前代未聞の大闘争一閻浮提に起こるべし」という日蓮の予言に導かれて成立した最終戦争論が大きく作用しているのではないだろうか。では、彼の最終戦争論に至る軍事理論と日蓮信仰はどのように監消したのであろうか。

さて、一九三一年（昭和六年）に勃発した満州事変は、見方を変えれば、石原が石原イズムを実行に移したともいえる。では、どのような理想郷を作ろうとしたのだろうか。『満洲占領地行政の研究』から確認し、石原イズムの影響を明らかにする。

1 日蓮信仰と国体主義

石原は田中智学が設立した国柱会の会員であったことはよく知られている。したがって彼の日蓮信仰の背景には、

当然、智学の考え方が大きな影響を持ったと考えられる。では石原が受け入れた智学の国体観はどのようなものだったろうか。

法華経の教説には「自分一人が救われただけではどうにもならない。世をあげて、一切衆生とともに」救われなければならぬとある。したがって、日蓮は、日本に「世界第一の本尊」を立てること、すなわち法華経によって日本が救われることを念願した。そこで、日蓮によって「法華経は日本の魂魄であり、日本国は法華経の色体」となったと智学は理解したのである。では、天皇を中心の日本国体と法華経をいかに結び付けるのであろうか。

実は、天皇と法華経をいかに結び付けるかは、日蓮教団全体の大問題であった。なぜなら、廢仏毀釈の暴風にさらされ、帝国政府を背景とする国家神道の前に、日蓮教団の勢いは風前の灯に見えた。智学は、この天皇と法華経をいかに結び付けるかという難問を法華経の「久遠実成」という概念と日本書紀の「万世一系」という概念を結合させることにより解決したのであった。

「久遠実成」とは、釈迦は35歳で悟りを開いたのではなく、永遠の過去から仏となつて輪廻転生を繰り返している、いわば釈迦の永遠性を讃えたものである。一方「万世一系」もまた、天皇家は連続と続いていることを讃えたものである。「久遠実成」の釈迦と「万世一系」の天皇はその永遠性において同義であった。ここに、日蓮信仰と国体主義は矛盾なく一体化したのである。

日蓮信仰に興味を持っていた石原は、同時に天皇主義者であった。したがって、法華経と天皇を結び付ける智学の国体日蓮主義は、自然に受け入れられるものであったに違いない。

2 日蓮信仰とアジア主義

智学は、日本書紀から「八紘一字」を取り出した。これは、日本の皇室がその高度の道義性に依拠しつつ世界を統

合することである。この「八紘一宇」という概念は、事実として「大東亜共栄圏建設」のスローガンとなっていた。確かに、智学は「（日蓮聖人は）世界統一軍の大元帥なり。大日本帝国はまさしくその大本營なり。日本国民はその天兵なり。」¹²と位置付けた。では、はたして彼は、戦前期から、武力進出による南方地域における「大東亜共栄圏建設」を目指したのだろうか。

智学の理解では、法華經による高度の道義性を持つ皇室が人類の法王庁として世界を管理する時「一切の戦争道具はみな不要となる」¹³、そして理想世界が顕現するのである。国家利益第一主義や権益主義を唾棄するが故に高度の道義性を持つ皇室が世界を統一しなければならないと考えたのである。そして、そのためには道義性の高い国家及び軍隊による戦いが必要なのであった。

そして、この考えは石原の容れるところであり、満州における戦乱も、その後の「五族協和」、「王道楽土」ためとして、実行されるのである。

3 日蓮信仰と軍事理論

石原は、欧州古戦史特にフリードリヒ大王とナポレオンの研究で名高い。そして、この古戦史研究から得た着想を日蓮信仰によって確信に変えていった。石原によれば、「私の世界最終戦争に対する考はかくて、1日蓮上人によって示されたる世界統一のための大戦争。2戦争性質の二傾向（決戦、持久）が交互作用をなすこと。3戦闘隊形は点より線に、さらに面に進んだ。次は体となること。これら三つが重要な因子となって進み、伯林留学中には全く確信を得たのであった。」¹⁴としている。

2および3は古戦史および現在の変化を考えれば、演繹的に到達する。なぜなら、科学技術の発達と人口の増加がこれらを可能にしたからである。そのうえで、「現在及将来ニ於ケル日本ノ国防」で次のように結論した。¹⁵まず、戦

闘は個人単位の飛行機による立体的活動となる。次に、国家のすべてが動員される。最後に、航空機の発達による殲滅戦略が採られる。

さらにその上で1が重要となる。石原は、飛躍的に次のように述べた。「東西両文明ノ総合ニ依リ最後最高ノ文明ヲ創造シ人類文化ノ黄金時代ニ入ルベキ閩門タル人類最後ノ争闘日蓮ノ所謂『前代未聞の大闘争』ハカクテ吾人ノ目前ニ迫リツツアリ」¹⁶である。つまり、世界平和は道義のみに依っては達成できず、「戦争術ノ徹底セル進歩」による『前代未聞の大闘争』が必要なのであった。日蓮の「前代未聞の大闘争一閩浮提に起こるべし」という予言がいかに大きなものかわかるであろう。

石原にとって日蓮信仰は、国体観、アジア主義そして軍事理論を束ねる精神的柱石であった。これを背景に満州事変に突き進むのである。さて、日蓮信仰は彼のみのものであったとはいえない。無論ここまで精緻には理論づけていなかったかもしれないが、当時の日蓮信仰は政治家や軍人等幅広い支持を集めた。そして、天皇から日蓮は立正大師の称号を下賜されるのである。ここに日蓮信仰の広がりを見るのである。したがって、石原の国体観、アジア主義そして軍事理論は多くの共感を得たのであった。

4 石原イズムと『満洲占領地行政の研究』

一九三一年（昭和六年）に勃発した満州事変は、国際連盟による戦争違法化体制をゆすぶったものと位置付けられている。¹⁷また、同時にこの政策形成過程は、佐官級及び尉官級陸軍将校が対外発展と国内改革を断行するため、既存の軍事指導層および政党並びに政府の指導者に対し挑戦したという、三つ巴の権力争いとして特色づけられている。¹⁸

戦争違法化体制のもと、日本国内でも戦争観の変更が行われる中で、中華民國の国権回収運動やソ連による共産主

義の浸透が盛んになると、世間一般には、満洲における日本の経済権益が侵害されつつあると考えるようになった。このような事態にも関わらず、何ら効果的な措置を講じない既存指導者層に幻滅した石原をはじめとする佐官級陸軍将校は、強硬な軍事政策をもって中国の挑戦に対処し満洲を支配下に置くことを目指したものである。では、その前段階となるべき占領地行政については、それまでと比べいかなる変化があったのだろうか。関東軍参謀部による『満洲占領地行政の研究』から、石原イズムの観点で見えてみよう。

石原イズムについてはどうであろうか。緒言において、「戦争によりて戦争を養う」¹⁹ことが述べられ、『満洲占領地行政の研究』の主題をなしている。このことと、満洲と日本の密接不離は欧州古戦史の大家であった石原の最も得意とするところであった。また、石原の軍事理論では日米最終決戦のための策源地が必要とされているが、まさに満洲がそうであった。²⁰また、アジア主義の観点では、日満の共存、住民福利の向上を目指す等、従来の占領軍政では見られない特徴であった。

つまり『満洲占領地行政の研究』の特徴は、占領地軍政を従来の治安維持、徴発に限定せず、占領地軍政機関が開発、植民、住民福祉等行政部門が拡大したことにある。

おわりに

さて、『満洲占領地行政の研究』で研究された作戦に付随した占領地軍政は、満洲にとどまらず、日中戦争および大東亜戦争でさらに広範に実施されることになる。²³ただし、その時の陸相は、満洲国の育成方針や日中戦争の指導で鋭く対立した陸軍大将東條英機であった。つまり、東條は不知不識のうちに、石原イズムを実行したことになる。その後、日本は敗戦を迎えるわけであるが、敗戦を契機に石原は絶対平和論者となる。この際の心的葛藤は筆者にとって興味があるところであり、次の機会に論じたいと思う。

1 日蓮宗

2 入江昭は、『日本の外交』（中央公論社、一九六六）一一一―一二二ページ、において、満州事変と石原大佐の日蓮信仰とは無関係としている。他方、五百旗頭真は「石原莞爾における日蓮宗教」において、深いかかわりを指摘している。本稿では、石原の持つアジア観が日蓮信仰により強化され、満州事変の実行に影響を及ぼしたことから論考を進める。

3

4

5 東久邇稔彦『やんちゃ孤独』（読売新聞社、一九五五）一〇五ページ。

6 石原莞爾「現在及将来ニ於ケル日本ノ国防」『石原莞爾資料―戦争史論』（原書房、一九七三）。

7 日蓮『撰時抄』。

8 関東軍参謀部調査班「満洲占領地行政の研究」防衛研究所 中央―戦争指導重要国策文書―二一九

9 田中智学『日蓮聖人の三大誓願』（真世界社、一九六〇）一三八ページ。

10 田中『日蓮聖人の三大誓願』三四ページ。

11 妙法蓮華経如来寿量品第十六。

12 田中『日蓮聖人の三大誓願』

13 田中『日蓮聖人の三大誓願』一八五ページ。

14 石原莞爾「戦争史大観の由来記」『世界最終戦論』（新正堂、一九四二）一八三ページ。

15 石原「現在及将来ニ於ケル日本ノ国防」。

16 同上。

17 小林『国際秩序の形成と近代日本』二五五―二五六ページ。

18 緒方貞子『満州事変と政策の形成過程』（原書房、一九六六年）七ページ。

19 同上、一三二ページ。

23	22	21	20
同上、 一五一ページ。	同上、 一六二ページ。	同上、 一五五、一六一ページ。	同上、 一五四ページ。